

サービスハウス通信

サービス付高齢者向け住宅の 制度が開始されました。

去る10月13日、小林理事長から、入居者の皆様に説明がありました。平成23年10月から新たな高齢者向けの賃貸住宅制度が始まりました。

サービスハウスでは当初より、安否確認・生活相談・緊急対応などの基本サービスと契約業者による住宅内での介護保険のサービスを提供しており、登録基準を満たしていますが、今後は入居者の皆様の自立を支援しながら、快適で安全な生活がお送りできるよう、一層の努力を行っていく所存です。

ソフト面でのサービスのひとつとして、10月20日より、訪問看護ステーションの看護師による健康相談や健康状態の確認等、また理学療法士による健康体操が行われております。何度看護師さんに相談をされても、健康体操に参加されても費用は一切不要です。どうぞ、お気軽にご利用下さい。



↑本館、アネックスでの理事長によるサービス付高齢者向け住宅制度の説明会

第12号
H23年11月8日
発行
社会福祉法人東光会
サービスハウス 事務局
TEL084-941-5255

皆様、どうぞよろしく!



赤木看護師



佐藤看護師

体調のすぐれないとき、病気について、健康についての相談など何かありましたらお声をかけて下さい。



昨年の九月に入職した理学療法士の清末です。主に介護老人保健施設に勤務しております。入所様の笑顔がもっと増えるようリハビリテーションとケア支援に取り組んでいきます。今後ともご家族及び地域の皆様のご協力とご指導をよろしくお願い致します。



皆様参加
てください

健康体操始まりました。

毎週火・土 15時～

於:アネックス1階デイルーム

私のいちばん!



アネックス玄関にある源平かざらの枝を、秋小口に押し木にしました。するとお部屋でも咲きました。

皆様には血圧に呉々もご留意の程を。
念のため、家内は享年六十四歳でした。

この句はその際私の心胸を詠った句です。最後の言葉もないままに突然の死ですから私の胸の内はばらばらでした、例えば預金通帳や印鑑の所在等の不明が悲しみに追討ちをかけて参り、その胸中を「がちやがちや」と言う季語に懸けました。説明はおこがましいと思いますが「がちやがちや」は轡虫くわむしの俗称で秋の季語です。

日頃「血圧が高い」と妻は申していました。が治療も受けず、当時の私も血圧について無頓着だった結果、あたら未だある命をみすみす捨ててしまったと今更ながら後悔しております。

がちやがちや
意識もどらぬままに妻
黒部 良三

平成七年九月二六日、家内は脳幹出血で倒れ集中治療室に搬送されました。その後一週間人工呼吸が施されましたが、意識はついに戻らず十月二日帰らぬ身となりました。

シベリアへ送られて



郡 誠司

昭和二十一年(一九四六)迎える

朝は静かに間違いなくやってきた。一月一日である。別に目出たくも誰も思っていない。ただ一日の休日に過ぎない。現地の人たちもこの一日が休日だった。明日からはまた作業が始まる。

今朝に限っていつもの時間に飯上げの音が聞こえてこない。まさか正月の特別食を作っているとも思いたくない。休日だから寝て待つことにしよう。八時を過ぎた頃やっとレールの音に飯上げに駆けつける。黒パン一片に野菜のスープ、中身に大した変化もなく、ただしっかりと油が浮かんでいる。昼だ夜だと変わったメニューでもなく一日の休日は終わってしまったのである。

第二練成隊

一月二日の日からラーゲリの兵隊たちは作業に出て行った。それから十日が過ぎた頃、ソ連ドクターの体力検査が行われることになった。二十年末までに百五十名からの死者を出してい

た。これを重く見て日本兵たちの体力衰退に対する処置に出たものと思われた。

検査の方法は至って簡単、兵の尻の皮膚をつまみ弾みのあるなしで判定されていた。三段階に分かれ、一、二級・・・日常一般の作業に就く、

三級・・・ラーゲリ内の軽作業
オ力(OK)・・・体力が回復するまで
休養

三級の軽作業集団を第一練成と呼称、第二の集団は限りなく栄養失調に近い体力衰退者と言えよう。我が中隊からも二十数名がいた。僕は同じ班にいた、伊藤兵、清水兵とペーチカに近い上段に枕を並べていた。

今日からパンが増量され、スープの中身が良くなるわけではなかった。それは思いうごしであった。一棟に集まった各中隊の集団は、先任の下士官がいて、朝一回は屋外で柔軟体操をしていたが、終われば部屋に戻り、ゴロゴロ、ブラブラ屋敷を堪能する。外には何の術もなかった。

要するに何もせず、体力の消耗を極力避けて自然回復を図る図式。ソ軍の考えそんな姑息な対策でしかなかった。僕らもそれで良いのでした。

特に目立った給与とは言えないが、一週間に一度、砂糖大根から採った砂糖をマッチ箱一杯支給され、二三日はそれを少しずつ舐めて楽しんでいた。

第二においても三週間が過ぎた頃から深夜に、トラックに数名が乗せられ、パン受領の使役で寒風に吹かれ震え上がったが工場について待っている形が崩れた。パンをくれ、分けて食った事があつたが、使役の役得かもしれない。

その後、食糧受領の使役に出たことがあつた。ソ軍下士官同乗だったが、この倉庫では、塩漬物が多く口に出来るものがない。重い樽詰めを少し積んで帰って来たのみだった。

数多く色々な使役に出たが、一番の約得は炊事のジャガイモの皮むき、五名で目の前に山となつている皮をむき始める。山となつているジャガイモが次第に少なく終わりに近づく。この頃、昼だ夜だと給食の終わった後で、残ったジャガイモのスープを飯盒一杯食わせてくれたことが良い思い出だ。およそ二カ月にわたる休養をしつつ、使役にも出たりしていたが、ついに練成解散となり復帰したのである。

ソ軍の練成とは実にユニークな方法であつたと思ひ返してみる。体力の消耗を極力避けて、自然回復を図ることにしたソ軍の姑息的な方法と言つて良い。

だからといって何時も使役ばかりに出たのではなく、我が中隊の二十数名が順次使役番に回っていたのである。何時もは何もすることがないからゴロゴロブラブラしては、昼寝を堪能し、少しの砂糖を舐めては過ごしていたのである。この練成という自然回復をひとつの思い

でとして残しておきたい。

*物々交換(その一)

兵たちはタバコを手に入れるのに苦労していた。ルーブル(通貨)は持っていないし考えたのが物々交換となる。多くの兵たちは、新しい化粧石鹸の一つや二つ持っていたからこれで交換の種にしてのいでいた。

物々交換(その二)

八島兵と僕は並んで寝ていた。ある日八島兵が、部隊使役でこっそりと手に入れていた大判の帆布を隠し持っていた。これで黒パンを手にしたいが、彼の作業場は原木の整理でオーブンだから方策が無く、僕の作業場は製材であつたから別室に機械室があつたので口スキー技師に頼つた。

帆布を見せると、手で触ってみていたがいっぺんに気に入つたのか「OK」のサイン。作業終了後、こっそりと現物を渡すと彼はこっそりと、雑のうへ、黒パンを一塊入れてくれた。

ラーゲリへ帰り、八島兵に成功を伝えるとともに喜んでくれた。その後、班長、通訳に分配していた。もうこんなことは二度と起こらなかつた。

次号につづく

